



NPO法人日本ビーチ文化振興協会代表理事 佐伯美香 MIKA SAIKI

環境大臣政務官

朝日健太郎 KENTARO ASAHI

環境大臣政務官

公益財団法人日本バレーボール協会会長

川合俊一 SHUNICHI KAWAI

環境大臣政務官

ツボを押さえて読むほどハマる!

はだし文化新聞

ふむふむ

2024 No.18 3/20

2024年3月20日発行 通巻第18号 発行/NPO法人日本ビーチ文化振興協会 編集人/佐伯美香 〒104-0033 東京都中央区新川1-1-7 リバーサイド茅場町3階 電話 03-3552-1171

編集スタッフ/吉田亜衣 (BeachvolleyballStyle) デザイン/島内泰弘デザイン室

INDEX

- 1面 特別てい談: 川合俊一×佐伯美香×朝日健太郎
2-3面 『2023年度 活動報告会』
4面 『ビーチライフ』in九十九里町2023, 開催

朝日 スポーツ競技団体が環境を意識した活動に取り組むこと、社会へどんな影響を与えるのかについて議論していきます。

特別てい談: 川合俊一×佐伯美香×朝日健太郎

行政とスポーツがタッグを組んで環境問題と向き合うプロジェクトを

川合 私は日本バレーボール協会の会長になる以前、日本ビーチバレーボール連盟の会長職を14年間勤めていました

朝日 スポーツ競技団体が環境を意識した活動に取り組むこと、社会へどんな影響を与えるのかについて議論していきます。

川合 SDGsに関わりたいたいという企業がいたり、スポーツを通して社員や社外に広めていくことも可能です。

昨今、重視されている環境問題。いま、国はどのような指針を立て、さらに自然と向き合っているスポーツ競技団体は、環境を守るためにどんな活動に取り組んでいるのだろうか。

朝日 私はそのカード、参議院議員会館事務所に展示してあります。

川合 SDGsに関わりたいたいという企業がいたり、スポーツを通して社員や社外に広めていくことも可能です。



ビーチスポーツは環境と親和性がある。自然体で違和感なく環境問題に取り組める



上:ビーチサン跳ばしに参加した神谷市長 下:地元・V3リーグに所属する千葉ゼルバによるバレーボール体験



上:海辺を駆け抜けた「ビーチライフ」中、名物の焼きそばはくわぐわぐと振る舞われた。下:焼きそばのシボルカラシ

川合 一人や一団体のチカラだけではまだまだ小さいけれど、環境省、日本ビーチ文化振興協会、日本バレーボール協会がタッグを組んで一体化する、より大きな効果を生み出せるはず。

朝日 いいですね。環境省でも海草・海藻などの沿岸・海洋生態系に取り込まれて蓄積される炭素「ブルーカーボン」の算定や保全に向けた取り組み等を推進しています。

川合 今後は国土交通省港湾局と環境省が手と手を取り合っていくのも理想ではないでしょうか。

朝日 元々取り組まれていたというアドバンテージは大きいですが、ビーチ・マリンスポーツをつなぐネットワークを形成してきました。

今年で4回目の開催となった『ジャパンビーチゲームズフェスティバル千葉2023』が10月14日(土)、15日(日)の2日間、千葉県千葉市の稲毛海浜公園いなげの浜で開催された。

全長約66kmに及ぶ雄大な里浜を舞台に『ビーチライフin九十九里町2023』が10月21日(土)、22日(日)に開催された。

1日目は「環境デー」(協力:海に学ぶ体験活動協議会)、2日目は「ビーチスポーツデー」として開催され、子どもから高齢者まで1920名がビーチに集まり、イベントの最後は九十九里町の観光大使である「かのんぶ」がピアノやウクレレで優しいメロディーをクラレレで響かせ、参加者たちは一緒に口ずさみながら歌声に酔いした。

弊会発足以来、様々なイベントを通じて環境保全活動に取り組みできました。『ビーチスポーツ』環境保全活動は、切っても切れない課題です。今号では、日本バレーボール協会会長の川合俊一様、元日本ビーチ文化振興協会代表理事・参議院議員・環境大臣政務官の朝日健太郎様と、環境問題をテーマにたい話させていただきました。



特別てい談: 川合俊一×佐伯美香×朝日健太郎



か。日本バレーボール協会は海だけに限らないし海と陸たくさんの方々を巻き込んで環境保全に向けて動いていく。環境を守っていくために自分たちは何をやるのか、宣言していくという参加型のプロジェクトはどうでしょうか。

今年も賑わいを見せた ジャパンビーチゲームズフェスティバル千葉2023

福島県の浜通り、双葉郡大熊町に軒家をお借りしています。大家さんは東日本大震災時の原発事故で郡山に避難、現在はそちらに移住されています。

近所には福島が大好きで大熊町に移住したフランス人の若手女性イラストレーターがブルーベリー等育てています。

が大熊町を訪れるんじゃないかと空想しています。いろんな災害や病気の蔓延を経験し、多岐化が進む現代。「残すべきものは残す」という判断も大切ではないでしょうか。

最終回 自然にふり立ち戻る 残すべきものを活用していく発想



日本ビーチ文化振興協会 顧問 宇都宮大学文学部教授 森本英香 Heika Morimoto



編集後記 佐伯美香

SPORTS to smile

～スポーツで社会を笑顔に～

NPO法人CHILL



上:昨年の「Snowboard in 富士見パラマラスノーパーク」にてフリースタイルの子どもたちと

第1回 さまざまな環境に置かれた子どもをスポーツの遊び場へ

今 回から始まる新連載は、ビーチ・マリンスポーツに携わる組織・団体が競技運営以外で取り組んでいる活動をフューチャーする。日本スラックライン連盟の会長である小倉 男氏は、NPO法人CHILLの代表理事も兼任している。2003年か

ら活動を開始し、震災で被災した地域の児童、児童養護施設、フリースタイルの児童を各地域のスキー場に招待してポードスポーツの体験会を開催してきた。フリースクールは小規模で運営している所がほとんど。体育の授業はありませんので、子どもたちが身体を動かす機会が生まれ先生方にも喜んでいただきました。当初は冬季に活動を行っていたが、2009年から日本スラックライン連盟の運営を任せられることになってからは、CHILLの活動にスラックラインを導入。現在は1年を通して子どもたちをスポーツの世界へ誘っている。

「子どもたちにとってはスラックラインの体験会に招待されたというのはい切関係ないです。たくさんのおスポーツがビーチにあるので、1日中かけてどのスポーツにも挑戦して楽しく遊ぶ姿を見ることができました。子どもたちに遊び場を提供し、成長を支えるCHILL。その風景を間近で見た小倉氏は、今後のビジョンを語る。「ジャパンビーチゲームズ全体で開催地周辺の児童養護施設やフリースクールに声をかけて子どもたちをビーチへ招待してほしいかがどううか。ビーチスポーツを知ってもらう、ビーチを利用してもらうきっかけが広がっていくはずだ。その未来が訪れるのは、遠い先のことではないはずだ。」



お台場のシンボル、自由の女神像 写真/真島 香

お台場で味わえる味自慢は、随時開催されている肉フェス、ビールフェスなどのグルメフェスで味わうことができる世界・日本各地から集まってくる名産品です。「これ」と言ったらお台場の名物はありませんが、お台場をひとたび訪れば、様々なグルメとの出会いが待っています。

おらが街の味自慢

グルメフェス

今年で創立21年目を迎えたNPO法人日本ビーチ文化振興協会は2月14日(火)、東京都内にて「2023年度活動報告会」を開催した。会には約100名の賛助会員が出席し、来賓から能登半島地震の被災者や関係者を気遣う言葉が次々に寄せられた。顧問の岩屋毅衆議院議員は「新型コロナウイルスの行動制限がなくなりようやく日常の生活が戻りつつありますが、年明けすぐに大震災に見舞われました。一日でも早い復興

『2023年度活動報告会』を開催

上:感謝状の授与式で大島校長と記念撮影
右下:祝辞を述べる岩屋衆議院議員
左下:報告会当日はバレンタインデー。理事からオリジナルチョコが贈られた



おらが街のビーチ自慢



かつては貯木場として活用されてきたお台場海浜公園。高度経済成長期には都市開発ならびに東京港の拡充に向けて整備も進んでいきました。そんな背景から東京都は「遠くまで通ったお台場の海を取り戻そう」と1975年に海上公園としてオープンしました。その当時はまだ港湾で働く人々の憩いの場。住み客の姿は見られませんが、風向きが変わったのは1996年。海と緑を身近に親しめる公園を掲げてリニューアルオープンを果たし、現在の姿に。都心にながらも自然とぶれ合える他、観光スポットも点在。四季折々に合わせたイベントが随時開催されているのが最大の魅力と語る。また、お台場海浜公園の「顔」と言えるビーチにおいては、ビーチスポーツのメッカとして盛り込まれています。ビーチパレー、ビーチテニス、ビーチサッカー、ビーチフットボール、フリースタイル、ビーチハンドボールは規約に準じて利用促進を図っています。

地域DATA
人口 1,616,000人
代表ビーチ お台場海浜公園
観光名所 自由の女神像
名産 随時開催のグルメフェス
宿泊施設 お台場海浜公園周辺にはホテルが多数

ビーチゲームズ日本招致プロジェクト

ジャパンビーチゲームズ須磨 2023

ビーチ・マリンスポーツ、各競技の公式大会が集結した「ジャパンビーチゲームズ 須磨2023」が11月4日(土)・5日(日)の2日間、兵庫県神戸市の須磨海岸で開催された。このイベントは、これまで東京・お台場や千葉、いなげの浜で開催してきた「ジャパンビーチゲームズ」をより競技化したもの。2017年から「ビーチライフin須磨」を開催してきた神戸市の誘致により、「ジャパンビーチゲームズ」の開催実現に至った。

誘致した理由について神戸市の港湾局・工務 防災担当部長兼露口伸二氏は「このような大規模なビーチイベントは初めてとなりました。夏場以外でもビーチ・マリンスポーツを通じて須磨海岸の魅力を発信することにより、須磨海岸に親しんでほしいというのが狙いでした」と述べた。

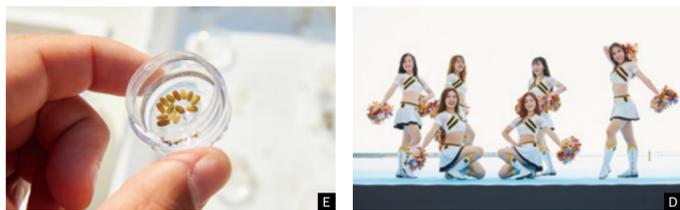
駅目の前に海が広がるアクセスの良さ、およそ1・8kmにのぼる海岸線を有効利用し、全7競技の公式戦を展開。子どもたちが環境と向き合う「アマモの移植体験」を実施した。また同時開催の「ビーチライフin須磨2023」では地元グルメを振る舞った「すまいる食堂」などのフードコートも設置され、来場者は2日間で25000人上った。

その風景を見た露口氏は、狙いが確信に変わったと言う。「ビーチスポーツは挑戦すると取り組みやすい競技が多く、見ているだけでもアクロパティクで楽しめるスラックラインをきっかけにフリースタイルを始めたい職員もいるんですよ。季節問わず幅広い層に楽しんでもらいたく、海岸だて改めて思いました。」

2024年6月には神戸須磨シーワールドもオープン予定。今後は須磨の魅力を届けるために広報活動を強化していく方針だ。



A 観客の注目を集めたスラックライン
B 日本初の開催となった「ジャパンビーチゲームズ」オープニングセレモニー
C 国内最高峰ジャンプツアーのメインコートで決勝戦を行った「ビーチライフin須磨2023」での「佐伯美香カップ」
D ステージを華やかに飾ったタイガースガールズ
E 「Suma豊かな海プロジェクト-2023」としてアマモの移植体験も実施された



伊予市・五色浜

日本・愛媛県

砂ソムリエ

朝日健太郎が目撃する

元プロビーチパレーボールプレーヤー・朝日健太郎が各地の砂を踏んで触ったビーチスポーツにふさわしい砂を選ぶ「砂ソムリエ」は、足跡の数で評価する。足跡3つが最高だ。さて連載第18回で取り上げるのは、愛媛県伊予市の五色浜の砂。

四国とはよく名付けたものだ。四国島は古来より4つ流れを持つ伝統文化と共に発展してきた。その一角を担う愛媛県から、四国カルチャーに触れるため全国から、そして海外からも大勢の人が訪れる。歴史を振り返ってみよう。人は海と共に生きてきた。その過程で人はあらゆるものを享受し、日本を形作ってきた。ここ五色浜には日本に誇れる歴史がある。

「五色」の由来となる源平の伝説と共に、近代では、女子高校生たちによる日本唯一の競演が毎年行われている。

私は五色浜に期待しない。この砂と共に、これからも心を揺さぶる新たな歴史が生み出されることに。旅の目的の一つに、五色の伝説をもつ砂の感触を加えることをお勧めする。

総合評価
〈はだし〉2つ半!!

評価の見方
色:白化度
粒:サイズの均一度
グリッド:踏んだときの剛柔
感触:踏んだときの気持ちよさ